

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

小学五年生の透子^{とうこ}は、月に一回、祖父のおつかいで「文藝春秋」^{ぶんげいしゅんしゅう}（論文、報道記事、評論などが多数掲載された総合雑誌）を雪野書店に買いに行っていた。ある日、透子に不審者が近づいたところ、雪野書店のおじさんが注意し追いついてくれる。

「おじさん、怖い人だと思ってた」

思い切ってそう打ち明けると、おじさんはびっくりしていた。

「どうして？」

「いつもにらむから」

「ああ、いや……ごめん、そんなつもりじゃなかったんだよ」

大人の人に謝られたのは、初めてだった。

「おじさん、離婚して……離婚ってわかる？ 都会からひとりでこっちに戻ってきたんだ。奥さんだった人と子どもは都会に残って、月に一回くらい会いに行く。あなたと同じ年頃の娘だから、本をあげるとしたらどんなのが好きかなあって、ついつい見ちゃった。あなたが選んだ本を、あの子にもプレゼントしようと思ったんだ」

大人の人に「あなた」と呼ばれたのも初めてで、というか、ここで「あなた」なんて言葉遣いをする人を見たことがなく、おじさんは本当に都会から来たんだと感動した。それから、「文藝春秋」しか買わないのが申し訳なくなった。

「お小遣い、少なくて」

あたしが言い訳すると、おじさんは「いいいいいよ」と笑ってくれた。その日の帰り道、あたしは、おじさんに何かお返しをしなきゃ、と考えた。牛乳の膜が張りついたところは火傷^{やけど}していて、皮がぺろんとめくれてきた。指で一つと剥^むいて食べるとうつつすら甘かった。

『かがみの孤城』^{こじょう}がいいと思う」

次の月、雪野書店に行ったあたしは、おじさんに堂々と伝えた。

「うん？」

「おじさんの子どもにあげたら喜ぶと思う。すごくおもしろいんだよ。学校に行けなくなっちゃった子が、ふしぎなお城に呼ばれる話なの。あたしは、学校の図書室で読んだ」

「へえ、そうなんだ。うちに在庫はあったかな……」

どれどれ、とおじさんは立ち上がり、「あった」と嬉し^{うれ}そうにぶ厚い本を持ってきてレジを打った。

「今度会った時、うちのお客さんからおすすめされたよって渡すよ。どうもありがとう」

大人の時から丁寧に「ありがとう」って言われたのは初めてだった。そうじゃなくても、すごく珍しい。あたしは馬鹿^{ばか}でどんくさいから。おじいちゃんとおばあちゃんがいつもそう言うし、あたしもそう思う。でも、きょうのあたしはおじさんのためになることをした。

「今度、また教えてあげるね」

「うん、よろしく頼む」

よろしく頼む、だって。¹すごい、あたし。

あたしはそれから、毎月の「給料日」には、おじさんに本をすすめてあげるようになった。『セロ弾きのゴーシュ』『黄色い部屋の秘密』『兎の眼』……おじさんはそれを買ひ、お店になれば注文する。おじさんの娘はいつも喜んで読んでくれるみたいで「チェロの音色を聞いてみたくなったって言ってたよ」とか「犯人がわかった時はあつと叫んじやったって」という感想を教えられるたびにあたしは嬉しくなった。

おじさんの娘は、とっても本が好きで頭がいいんだろう。あたしとは大違い。

本当のことを言うと、あたしはおすすめ本を一冊も読んだことがない。近所の悠介ゆうすけから聞いている。悠介は同じ年で、同じクラスで、いつも本を読んでいて、体育の授業はたいい見学している。身体が弱いらしい。悠介に「何読んどの？ どんな話？」と訊くと、面倒くさそうに教えてくれるから、あたしはそれを忘れないよう、すぐノートに書く。

「何でそんなこと訊くの」

何回めかの時、悠介はふしぎそうに尋ねた。

「おまえ、馬鹿なんだからどうせ読まないだろ」

「うん、よくわかんない。すぐ眠くなっちゃう」

あたしがけろっと答えたせいか、悠介のほう2が気まずい顔をしていた。あたしは悪口を言われるのに慣れているけど、悠介は悪口を言うのに慣れていない。

「本屋のおじさんに教えてあげてんの。悠介、雪野書店に行かないの？」

「品揃ぞろえ悪いじゃん。アマゾンかヨドバシで注文する」

「雪野書店だって注文すれば取り寄せてくれるよ？」

「遅いから」

みんな、何でもたくさん持つて、早くしてくれるところが好き。それは馬鹿じゃなくてどんくさくないってことなんだろう。当たり前だよな、とあたしは思う。あたしのお父さんは最初っからいなくて、お母さんは、あたしが小学校に上がるちょっと前にいなくなった。最後に覚えてるのは、茶の間で低いテーブルに突っ伏ふして泣くお母さん。あたしに「あいうえお」を教えている途中で、五十音表をぐしゃぐしゃにして「あーっ、もう！」と叫び、泣き出した。「何でこんなのもわかんないのよお」と。

—— あんた、そんなんでこれからどうすんのよお。

あたしは畳の上にぺたんと座ったまま、何も言えなかった。何でひらがなを覚えられないのか、自分がこれからどうなるのか、ちつともわからなかったから。今はひらがなが読めるし九九も言えるけど、ほかのみんなはもっと先に行ってしまったてい

て、お母さんが帰ってきてきつとまた泣いちゃうだろう。

お母さんはあたしに「透子」と名づけた。おじいちゃんは「優秀の秀が入って、名前負けもいいとこだよ」と近所の人にこぼしていた。近所の人は、笑っていた。クラスのみんなは「透明人間の透」と言って、よくあたしのことが見えないふりをした。あたしが話しかけると「誰もいないところから声が聞こえる!」「こわーい」と騒ぎ、あたしの机にはプリントを回さない。あたしは別に平気だった。悠介はそういう時、³誰のことも見えていないように黙って本を読んでいたけど、いつも横顔が泣きそうに見えて、かわいそうだった。「気にしないでいいよ」と声をかけたら本当に泣き出すかもしれないと思うと何も言えなかった。あたしのせいで泣く人は、お母さんだけでたくさんだ。

中学、高校、とあたしはおじさんに本をすすめ続け、おじさんは素直に買い続けた。『舟を編む』『砂の女』『輝ける闇』『蒼穹の昴』⁴『深夜特急』『ライ麦畑でつかまえて』『朗読者』……。悠介は賢い子が行く高校に合格し、あたしは「名前を書けば誰でも入れる」という噂の高校を受け、実際、名前しか正解した心当たりがないのに合格できた。学校が離れても電車の路線は同じだからよく会った。「何読んでるの? どんな話?」というあたしの質問に、悠介は決まって面倒くさそうに答えた。でもシカトしたり「うるさい」と怒ったりは、しなかった。

高校を卒業した後は、地元の、おじいちゃんの知り合いが店長をしているパチンコ屋に就職が決まっていた。給料は安くてもいいから、とにかく雑用でも何でも、簡単な仕事を振ってやってくれ、とおじいちゃんは何度も頭を下げていた。おばあちゃん「高卒ってだけで御の字だ」と涙ぐんでいた。落ちこぼれが通う高校の中でもあたしはトップオブ落ちこぼれで、追試と補習を繰り返してどうにか三年で卒業できるようにしてもらえた。出席日数には問題がなかったのと、留年させたら先生たちも面倒だからだと思ふ。⁴あたしは、アマゾンやヨドバシにはどうやってもなれない。

パチンコ屋は好きじゃないけど、あたしにできる仕事があるんなら嬉しい。困るのは、悠介が東京の大学に行ってしまうことだった。おすすめの本が訊けなくなる。

二月の「給料日」、もう学校の授業はなくて、あたしはパチンコ屋の店長に連れられ、お店のいろんな人に「春からよろしくお願いします」と挨拶して回った。それから「卒業祝いにこれで打ってみな」と五千円札を一枚渡され、打ち方を教わった。めまぐるしいパチンコ台の電飾とけたたましい音にくらくらしながら、適当にハンドルを回したりボタンを押したりしていると、何がよかったのか、五千円は五万円くらいになった。店長は「すげえ、パチプロの才能あるんじゃない？」と一万円抜いて残りをあたしに渡してくれた。そんな大金を持ったのは初めてで、嬉しくないわけじゃないけど、これは「悪いこと」や「怖いこと」とどう違うのかと戸惑った。パチンコ玉がぎつしり詰まったドル箱は重たく、銀色の玉の山に手を突っ込んでざりざりかき混ぜると気持ちよかった。

お金をコートのポケットにしまつて、雪野書店に行った。最近悠介に会えていないから、本をおすすめできないことをおじさんにどうごまかそうかといういろいろ考えたけど、あたしの頭では思いつかなかった。店に着く頃には、雪が降り出していた。

「ああ、いらつしゃい、きようは遅かったね」

「うん」
あたしがおじさんにしていると、おじさんはいつもの「文藝春秋」を差し出しながら、「ここ、閉めるんだ」と言った。

「え、なんで？」

「いやまあ、儲^もからないからねえ。父親から、この店はつぶさないでくわつて頼まれてただけで、去年の暮れに死んじゃつてさ。おれ自身は、本屋に興味があつたわけじゃなかったし」

まあ、だから、そういうことで。あたしは、シヨックな顔をしていたのかもしれない。おじさんはひどく心苦しそだった。

「雑誌はさ、出版社に定期購読頼めば郵送してくれるから。おじいさんに教えてあげて」

「うん」

おじいちゃんはもう、「文藝春秋」を買わないだろう。今までだって、きつちり読み通したのを見たことがない。おせちを

あれこれつくづくようにばらばらと目を通したら、ぶ厚い雑誌は玄関先に積まれてそのうちごみに出される。

「寒いね。ホットミルク作ろうか」

おじさんがレジの内側から段差を上がって奥へ引つ込むと、あたしは店の中を見回し、雑誌や本のポスターとは違う貼り紙に気づく。

『二月末日をもって閉店いたします。長らくのご愛顧ありがとうございました。店主』

「愛顧」という難しい漢字には読みがながふってあったので読めた。「愛」がLOVEなのは知ってる。きつといい意味の言葉なんだろう。ご愛顧されなかったから閉めるのに。でも最後だから、いいことを言わなきゃ。あたしもお母さんに「ご愛顧ありがとう」って言ってあげればよかった。そしたらお母さん、あたしのことをちょっと見直してくれたかも。そんなことをほんやり考え、最後だから、レジの内側に回ってみた。おじさんがいつも見ていた景色だと思うと楽しかった。ちよろちよろするあたし、立ち読みする男の人、付録をチェックする女の人、絵本を選ぶちいさい子。おじさんはここで何人のお客さんを見てきたんだろう。

ふと足元に視線を落とすと、レジ台の下に段ボール箱が置いてあり、蓋がちよつと浮いて中身が見えていた。本の表紙だ。売れ残りかな。そういえば、本屋さんは閉店セールとかしらないだろうか。ちらつと覗く表紙に見覚えがあったので、あたしはそつと蓋を持ち上げる。やつぱり。

先月、あたしが(悠介から聞いて)すすめた、『細雪』の文庫本。これで「ささめゆき」って読むなんて、日本語は本当に難しい。その隣には『ソロモンの偽証』。あたしが、先々月すすめた。その隣には『檜家の人びと』『五番目のサリ』『82年生まれ、キム・ジヨン』……全部、見覚えがあった。本を持ち上げてその下を確かめても、あたしが教えた本ばかり。どういうこと？

わけがわからず中腰のまま固まっていると、おじさんが戻ってきた。振り返ったあたしと目が合い、「見た？」と笑う。牛乳の膜みたいになにやつと頼りない笑顔だった。

「ねえ、娘は？ 本、渡さなかったの？」

あの感想は、全部嘘^{うそ}だったの？ 自分こそずっと嘘をついてきたくせに、あたしはちよつとむかついていた。

「渡せなかったんだ」

おじさんはぼつとつぶやいた。顔に落ちてきた雪の粒みたいに、たちまちつめたく溶けそうな声で。

「月一回、必ず会えるはずだったのに、奥さんだった人はどこかに行ってしまった。黙って引越して、電話番号も銀行の口座も変えて、どこでどうしてるのかわからない」

「なんでそんなひどいことするの？」

「わからないだよ」

マグカップから昇る白い湯気の向こうで、おじさんの目鼻口がどんどん薄くなっていく。のっぺらぼうになって、どんな表情なのか見えない。あたしがごしごし目を擦^{こす}っても。

「離婚しても、親同士ではいようって約束したのに。何がいけなかったのか、どうすればよかったのか、どんなに考えてもわからないんだ。苦しいのに、あなたを見るとあの子を思い出して、考えずにいられない。とっさに嘘をつく、あなたは本をすすめてくれた。嘘だと言えなかったから、自分で読んで、娘の感想のふりで伝えた。それがずっと続いてしまった。申し訳ない」

「全部、読んだの？」

「うん」

すごい。違う。あたしがすごくないんだ。おじさんはあたしと違って馬鹿じゃないから、当たり前前に読めるんだ。急に、自分が馬鹿であることが悔しく、恥ずかしく思えた。

「全部読んだけど、どうすれば娘にまた会えるのか、自分の苦しさが楽になるのか、どこにも書いてなかったよ」

「じゃあ意味ないじゃん」

「そんなことはない。物語の中にいろんな苦しみや喜びがあった。今まで味わったことのないたくさんさんの感情に出会えて、自分とは違うのに、おんなじだと思えた。みんな等しく、それぞれの何かを背負う。重さや年月は問題じゃない。だからもう、

苦しみから逃れようとして苦しむのをやめた」

「わかんないよ」

あたしは言った。

「馬鹿だから、わかんない」

「あなたのおかげだ、ありがとう、つてことだよ。本屋はつぶしちゃうけど、これからも本を読むと思う。今度は、自分で選んで」
おじさんは、あたしの嘘を知っていたのかもしれない。こんな狭い町だから、あたしが馬鹿なのはみんなに広まつる。

「『あなた』じゃない、透子だよ」

「透子さんか、いい名前だね」

「透明人間だから、いてもいなくても一緒ってこと」

「そんなことはない」

おじさんは怒ったような、でも怒ってはいない顔で言った。

「そんなわけがない」

（中略）

百円とか二百円はすぐなくなっちゃうから、もっとたくさんのお金で、梅ジャムせんべいでもビッグカツでもない、何かきららしたものを買ったかった。そうしたら、馬鹿なままでも生きていけそうな気がしていた。

「段ボール箱にある本、あたしに売って」

「これは売り物じゃないよ」

「⁶じゃあ、お店の棚から同じもの売って」

あたしはそう言い張り、約七年ぶんのおすすめ本をできる限り揃^{そろ}えてもらった。四万円ちよつとになった。おじさんは「この店の過去最高売り上げだ」と、長いレシートが出てくるのを喜んで見ていた。ぱんぱんの紙袋を両手に提げ、あたしは店を

出た。持ちきれなかったぶんは、あした届けてくれる。

「透子さん、元気でね」

おじさんは——おじさんも、この町を出て行くのかもしれない。おじさんがなくなったたら寂しいけど、そのぶん、ここにいないおじさんが、どこかで娘に会えているかもって自由に想像できる。お母さんも、あたしから離れて、どこかで楽しく暮らしてるかもしれない。そうだったら嬉しい。そっか。いなくなつて透明になった人のことは、幸せなふうに考えられるから、いい。

「おい」

歩き出してすぐ、声をかけられた。悠介だった。

「なに、その荷物」

「本」

「全部？」

「うん」

悠介は片方の紙袋を強引に取り上げ「おも」と顔をしかめた。

「そっちも貸せ」

「重いからいいよ」

「重いから持つんだよ」

「いいってば。パチンコ屋でドル箱いっぱい運ばなきゃいけないだし、今から練習」

抵抗したけど、結局両方とも奪われてしまった。あんなにひ弱だった悠介が、いつの間にこんなにたくましくなっていたんだろう。

「本なんか大量に買ってどうすんだよ」

「どうしよう」

「何だそれ」

「欲しかったの。でも、きつと読めない。どうしよう。あたしも本から教えてほしいのに」

悠介は何か言いかけて、ぐつと飲み込んだ。「馬鹿」つて言おうとしたのかもしれない。飲み込んだあと、ミルクみたいに白い息を吐きながら「教えてやるよ」と言った。

「俺が、全部、説明してやる」

「すぐ忘れちゃう」

「したらまた教える」

「東京行くんでしょ」

「行くけど、できるよ」

おじさんみたいに、約束を破られたらどうしよう。悠介を信じていられる方法は、悠介があたしをご愛顧してくれる方法は、この本たちのどこかに書いてある？ あたしはおじさんに訊きたくなって来た道を振り返った。「雪野書店」の文字は、途切れ途切れの雪の流れと混ざって読めない。

⁷「悠介、透明にならないでね」

あたしは言った。

⁸「あたしのことも、透明にしないで」

「そんなことできたら、俺はノーベル賞もらってるよ」

そういう意味じゃない、けど、うまく説明できそうにない。悠介のコートの袖口をつかむと、悠介は一瞬びくつとして、でも振り払わなかった。まつげに降ってきた雪が溶けて視界がぼやけ、見慣れた町の寂しい明かりがにじんで見える。

（一穂ミチ『うたかたモザイク』所収「透子」による）

問一 ―線部 1「すごい、あたし」とあるが、このときの「あたし」は何に対して「すごい」と思っているのか。説明せよ。

問二 ―線部 2「悠介のほうが気まずい顔をしていた」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 自分の悪口に言い返されることなく、素直に認められたから。

イ 好きだから悪口を言ったことに気づかれて、かわされたから。

ウ 自分で言った悪口が、自分のことを示しているように感じたから。

エ すぐ眠くなるのに本の内容を聞かれることが、かわられていく気がしたから。

問三 ―線部 3「誰のことも見えていないように黙って」とあるが、ここから読み取れる悠介の気持ちとして適切なものはどれか。次の中から選び、記号で答えよ。

ア 透子を透明人間のように扱ういじめに対する嫌悪感。

イ 透子を他の子と区別しないように扱おうとする気配り。

ウ 透子を好きなことを周りに気づかせないだろうかという不安。

エ 透子を守ってあげたいけれど守ることのできないもどかしさ。

問四 ―線部 4「あたしは、アマゾンやヨドバシにはどうやってもなれない」とあるが、ここでの「アマゾンやヨドバシ」とはどのような意味か。本文中から二十字以内で探し、はじめの五字を書き抜け。

問五 ——線部 5「自分こそずっと嘘をついてきたくせに、あたしはちよつとむかっていた」とあるが、透子のついた嘘と、おじさんのついた嘘の内容を、それぞれ簡潔に説明せよ。

問六 ——線部 6「じゃあ、お店の棚から同じもの売って」とあるが、透子はパチンコで手に入れたお金で「四万円ちよつと」も買い物したのはなぜか。透子の「大金」に対する意識を明らかにして、説明せよ。

問七 ——線部 7「悠介、透明にならないでね」——線部 8「あたしのことも、透明にしないで」とあるが、それぞれ「透明」の意味をあきらかにして、ここでの透子の気持ちの説明せよ。